

平城宮跡第117次発掘調査現地説明会資料

1979年12月1日

立木 修

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では、推定「第1次内裏」地区の調査を、1965年以来（27・41・69・72・75・77・87次調査）継続して実施してきた。今回の調査で、その東半部の発掘を完了する。今回の目的は、とくに、「内裏」中枢部以南の広場、および「第1次内裏」を区画する諸施設の変遷を明らかにすることにある。調査は10月1日より開始し、現在継続中である。発掘面積は約3300㎡である。

遺構の概要

調査地区周辺の地形は、北から南へなだらかに傾斜する丘陵末端にあたり、地山は赤褐色の花崗岩バイラン土を主とする。第1次内裏は、丘陵を削平・整地したのちに造営している。検出した遺構は、掘立柱建物2、掘立柱塀2、築地塀1、築地回廊1、溝6、土壇、埴積擁壁、石積擁壁、礫敷広場（上下2層）などがある。

A期（和銅年間～天平勝宝年間）

この時期の遺構は、埴積擁壁 S X 6600、東面を画する塀 S A 3777、築地回廊 S C 5500 およびこの雨落溝 S D 04・3790、下層礫敷広場 S H 15A がある。

埴積擁壁 S X 6600は、発掘区北端で南折し、約15m南で平坦面となる。埴は保存良好な部分では基底部の2段が残る。南折した擁壁の東側は斜道となって、北側の壇にとりつくのであろう。擁壁の前面は、礫敷広場 S H 15A となる。築地回廊 S C 5500は、大半を削平されているが、築地部分の足場穴 S X 3795、軒先の足場 S X 14・15、雨落溝 S D 04・3790によってその規模を復原できる。塀 S A 3777は、柱間が4.6m（15.5尺）等間で、11間分検出した。ただし、南から5間目と6間目に相当する位置に柱穴はなく、この部分は出入口となっていた。なお、S C 5500の築地心下層に柱穴1を検出した。

B期（天平宝字年間～延暦年間）

この時期の遺構は、建物 S B 01、溝 S D 03、土壇 S K 10、石積擁壁 S X 12、上層礫敷広場 S H 15B がある。

A期の埴積擁壁を廃し、壇を南へ約20m拡張する。自然石を東西にならべた S X 12は、拡張後の擁壁の一部である。B期の広場は、A期の広場を整地したのち、再び礫敷とする。建物 S B 01は、桁行5間、梁間3間の北廂をもつ東西棟建物で、柱間は2.4m（8尺）等間である。検出層位からこの時期に考える。東西溝 S D 03は自然石で護岸した浅い溝である。土壇 S K 10は深さ約2mの土壇で、内部には完形の埴などを多数廃していた。

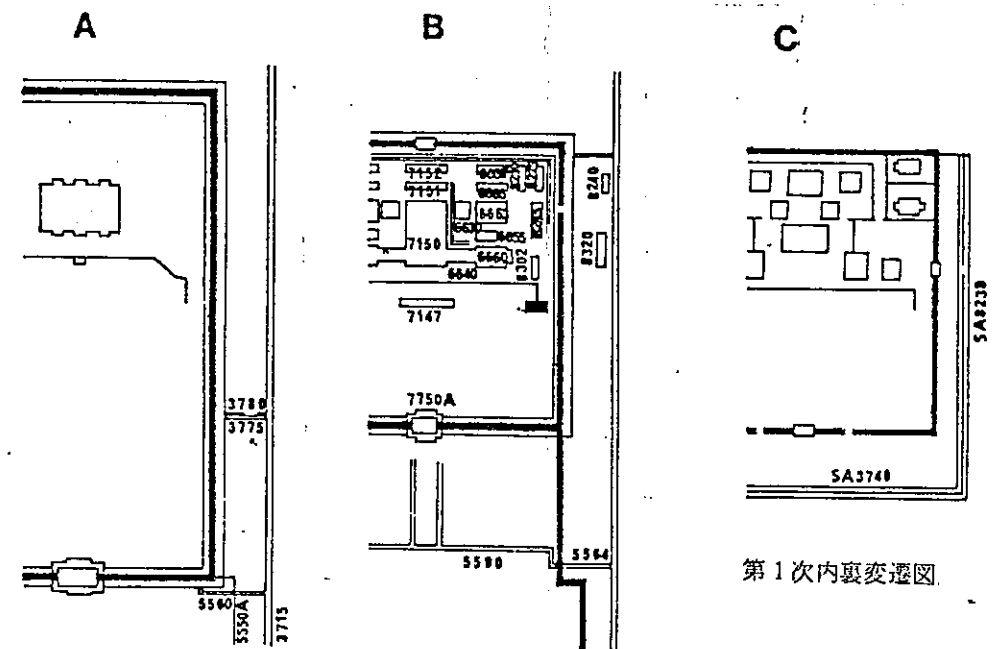
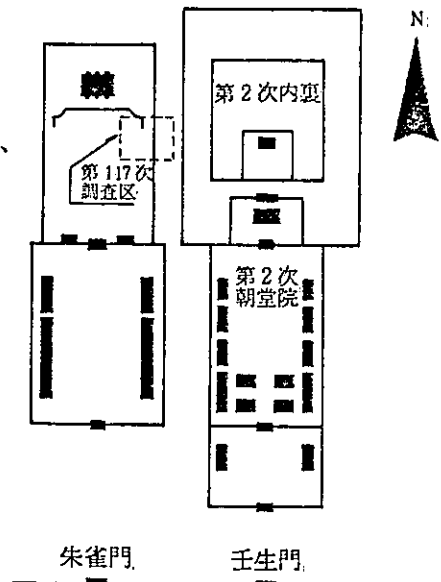
C期（大同年間以降）

この時期の遺構は築地 S A 3719、塀 S A 8238、建物 S B 02、溝 S D 8226・8237・8239 がある。

築地 S A 3719は、現存する南北の高まりである。黄褐色粘質土を荒く積みあげている。溝 S D 8226は、築地の西側雨落溝である。建物 S B 02は、桁行3間、梁間2間の南北棟建物である。塀 S A 8238は、柱間が2.7m（9尺）等間の南北塀。溝 S D 8237・8239はこの塀の雨落溝。

まとめ

第1次内裏地域は、大きくA・B・Cの3期の変遷がある。A期は、内裏全体が東西約190m、南北約290mの区画をもち、北約3分の1の位置に埴積擁壁を築く。その北側壇上に東西約54m、南北約30mの壮大な礎石建物が1棟だけ造営される。壇は、両翼が南に張り出し、壇下は広場になる。B期の区画は、南北が縮小され、約190m四方となり、壇を南に拡張する。壇上には整然とした掘立柱建物群を造営する。C期の区画はB期と変わらず、建物がB期より少なくなるが、配置は整然としている。さて、これまでの調査によって、この壇の前面は両翼が南側に張り出すことがわかったが、末端部分については不明であった。今回の調査では、壇の前面の埴積擁壁 S X 6600が、発掘区北端でさらに南折し、約15mのびることを確認した。B期にはA期の壇を南に約20m拡張し、河原石によって新たな擁壁を築く。この擁壁の南約10mに北廂建物をたてる。これは以前、広場の中央部で検出した掘立柱遺構 S X 7141と、北側の柱筋を揃えている。このような位置に建物があることは、「内裏」中枢部がある、壇上に対する壇下の空間利用の一端をうかがわせるものである。



第1次内裏変遷図

平城宮跡第117次調査遺構概略図

